

学生海外調査研究	
18 世紀のフランス・モードにおけるアンディエヌの特徴及び受容に関する研究のための資料調査	
権 裕美	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 10 月 19 日～2010 年 11 月 17 日
場所	フランス パリ、アルル、オランジュ
施設	フランス国立図書館、装飾芸術美術館付属図書館、レアテュ美術館、オランジュ歴史芸術美術館

1. 海外調査研究の必要性及び目的

「アンディエヌ」indienne ということばについて、一般に「インド更紗」と説明されているが、アンディエヌは、この意味のほかに、フランスで使用・製造されるあらゆる更紗を指して使われる。そればかりか、さらにそれで仕立てられたローブまでを指し、幅広い意味も持っている。また、アンディエヌは誰によってどこで製造されたのか、どのような目的のために作られ、どのような貿易路を通して取引されたのかなどによってさまざまな名称が存在する。そのためアンディエヌに関する名称を調べることは、欠かせない作業であると考えられる。

各種の辞典において、アンディエヌがどのように定義されているのか、アンディエヌの意味を確認しておく必要がある。1750 年刊行のジャック・サヴァリ・デ・ブリュスロン『商業、博物学と技術の全辞典』¹、1838 年に初版が刊行されたアンリ・アヴァールの著作『13 世紀から今日までの家財と装飾の辞典』²など、17 世紀から 20 世紀まで、時代を代表する辞典によれば、アンディエヌの意味は次のようである。アンディエヌとは、まず、インドで生産された、多様な色彩や図柄が手描き染め、またはプリントされた綿の布地を意味する。そして、この布地で作られた男性や女性のための部屋着も意味する。さらにインドの綿布を、ヨーロッパで模倣し製造した布地もアンディエヌと呼ばれた。しかも 17 世紀の後半には、綿布以外の、薄い羊毛とリネンで模造したものもアンディエヌは指した。

アンディエヌのもつ多様な意味を、これまで筆者は 18 世紀のモード雑誌や、喜劇、手紙などを通して確認してきた。男女の部屋着や散歩に着用する軽い衣服に限らず、カーテンや椅子、寝台など調度品にまで幅広く使われたことが明らかになっている。また、アンディエヌの広い意味と、多様な方面への使用はアンディエヌの大流行の証であると思われる。

アンディエヌに関して論じた 18 世紀の経済学者

フォルボネーの著書³では、アフリカ地域との貿易のためのギニア向けのアンディエヌがあることが述べられている。また、アンディエヌに関する先行研究やポンパドゥール夫人の財産目録には、フランスの南部の都市オランジュで生産されたトワル・ドラージュという名のアンディエヌが存在していることが記録されている。つまり、アンディエヌには、貿易の対象、生産地によって異なる名称が存在するということである。また、ポンパドゥール夫人の財産目録に記録されているさまざまな綿布は、綿布に多彩な色彩で文様を染色したアンディエヌの流行が背景にあると推測される。今回の海外調査研究では、アンディエヌを含むフランス国内で生産された 18 世紀の織物が収録されているリシュリュー・コレクションを調査し、アンディエヌ及び多様な綿布を調査することによって、アンディエヌとアンディエヌの関連用語、その他の綿布に関する用語を明らかにし、アンディエヌの流行を 18 世紀織物史に位置づけることを主な目的とする。

2. 調査の概要

2.1 リシュリュー・コレクション

フランス国立図書館に所蔵されているリシュリュー・コレクション⁴は、ルイ 13 世の時代に宰相を務め、フランスの絶対主義の基礎を築いたリシュリュー枢機卿(1585-1642)の甥の息子にあたる、元帥リシュリュー公爵(1696-1788)の主導の下に収集、整理された布の見本集である。リシュリュー・コレクションを集大成した元帥リシュリュー公爵もまた、ルイ 14 世、ルイ 15 世、ルイ 16 世と 3 代のフランス国王に仕え、国王の第一の側近として重責を果たし、24 才のときにアカデミー会員ともなった人物である。彼の死後、長い時間をかけて整理された財産目録の中には、二折判の手稿本 52 巻があり、1715 年より 1736 年に至る、「われらが時代の逸話、版画、肖像、地図、儀式」、モードに関しては、絹、綿、麻織物などの見本がふくまれている。織物見本集は、整理番

号 LH45 から LH45(F)までの7冊に整理されていて「われらの時代の逸話」のコレクションの一部をなしている⁵。この見本帳には生産年や生産地が手書きで記されている。

ここに収録されている織物の見本は、1720年から1737年に至るまで、フランス国内及び国外で生産された、変化にとむ、あらゆる種類の織物を示し、ありふれたものから、豪華で、この上もなく見事なものまでである。ツーロン港の徒刑場の刑囚たちによってつくられたものから、リヨンの製造所の絹織物、ブローカー、ダマ、タフタ、紋ビロードや型押しビロード、無知や縞や錦織など、貴族や王の衣装として作られたものまで及んでいる⁶。18世紀フランスの膨大な織物を収録している貴重な資料である。

リシュリユー・コレクションの見本7冊の中で、第1巻である目録番号 LH45 は、リヨン産織物、アベビル、ニム、ルアン、マルセイユなどで生産された多様な織物を収録している。ここには、1736年マルセイユで生産された、「アンディエンヌ又はギネー」Indiennes ou Guinées と名づけられた見本が、整理番号126番から136番まで11点収録されている。白地又は青地に褐色、赤、緑、黒を用いて花と枝を手描きで染めた織物である。また、「アンディエンヌ・サン・ジョゼフ又はシフラカニ・ダレブ」Indiennes S.Joseph ou Chiffacanni d'alep と名づけられた、白地に赤色で鮮明に手描きで染められたものが整理番号140に収録されている。その他、縞模様の綿布、「シャモワズ」Siamoise、「バザン」Basin、「クティエ」Coutilなどの綿布も収録されている。

第2巻、目録番号 LH45(A)は、ペルピニャン、カタロヌなどで生産されたレース、リボン・テープなど装飾用の織物が収録されている。第3巻、目録番号 LH45(B)には、夏用の絹織物、毛織物、ベルベットなどが主に収録されている。

第4巻、目録番号 LH45(C)は、大部分が綿織物で、今まで調査してきた綿織物に関しての見本が全部収録されていた。ルアンで生産された縞模様の「シャモワズ」が整理番号2117番から2159番まで、「縞模様のトワールとチェックのトワール」Toiles rayée et à carreaux が整理番号2160番から2209番まで、2228番から2237番まで、2357番から2358番まで、収録されている。「クティエ」は整理番号2210番から2227まで、2356番、2359番から2374番まで収録されている。「フュテンヌとバザン」Futaines et Basin が、整理番号2303番から2310番まで収録されている。その他「綿織物」と名づけられているのが、整理番号2275番から2277番まで収録されている。また、名称は記録されていないが、綿織物と推測されるものが整理番号2406番から2413番まで収録されている。

第5巻である目録番号 LH45(D)には、1736年オランダで生産された織物が整理番号2420番から2451番まで、ジェンヌで生産された織物が整理番号2692

番から2702番まで収録されている。

第6巻の目録番号 LH45(E)、最後の第7巻である目録番号 LH(F)には、リボンの見本が収録されている。LH45(E)には、生産地は記録されておらず、1732年から1736年までの年代だけが記されたリボンが整理番号2820番から4233まで1414点、収録されている。LH(F)には、フランスのパリ、リヨン、オランダ、イタリアなど、各地で1736年から1737年まで生産されたリボンが、整理番号4234番から4819番まで、586点収録されている。

アンディエンヌと綿織物は第1巻の目録番号 LH45 と第4巻の目録番号 LH45(C)に収録されている。以上の資料はすべてに説明が書いてあるわけではないが、それぞれ生産地、生産年、織物組織、用途、値段などが部分的に手書きで説明されている。

収録されている綿織物の中で、模様が染め出されているのは「アンディエンヌ又はギネー」、「アンディエンヌ・サン・ジョゼフまたはシフラカニ・ダレブ」などである。また、柄が入っているものとして縞模様、チェックの模様の綿織物は、絹織物に表現された文様とは区別される透明な軽い感じの色合いであった。青、赤、緑、黄色などの組み合わせの多様なデザインのチェックは現代人の目にも明るい軽快さが感じられた。

リシュリユー・コレクションが収集された1732年から1737年までは、フランスではアンディエンヌの輸入・生産が禁止されていた時期に相当する。フランスでは、経済的損失を回避し、伝統織物産業を保護する目的で、アンディエンヌの輸入・生産が1686年から1759年まで禁止されていた。その間に集められたリシュリユー・コレクションは、当時フランス国内では自由港としてアンディエンヌの生産と貿易が可能であったマルセイユの布見本のみを載せている。

リシュリユー・コレクションに載せられている数多くの名称の綿布の見本は、18世紀、軽く実用的である綿布への好み、流行を表し、何種類の綿織物を生産し消費したのかを如実に示している。このような綿布の名称は、ポンパドゥール夫人の財産目録に記録されている各種の綿布の用途とも関連付けられ、18世紀の綿布への好みを明らかにすることが可能であろうと思われる。

今回の調査で特に注目したいのは、「アンディエンヌ又はギネー」という名でリシュリユー・コレクションに載っている「ギネー」についてである。ギネーは、インドのボンディシェリから来た上質の白い綿布⁷を指す。または、白い綿布で、自然のままのもの、または濃いブルーで染められたものを指し、この布地は調度品の裏地に使われた⁸という。つまり、「ギネー」は、インドから輸入された白い綿布、または濃いブルーで染められたものを指しているが、リシュリユー・コレクションによる見本集にはアンディエンヌと同じく綿布の上に多様な模様と色彩が

染められたものを「ギネー」と記録し、11 点が収録されている。用語の再検討が必要である。マルセイユの商業会議所出版の最近の研究書では、「ギネー」には白い綿布と、アンディエンヌと同じ方法で文様が染められた布の二つの種類が存在すると述べている⁹。今後、アフリカ地域、特にギニアとの貿易独占のために 1720 年に設立されたギネー会社¹⁰の活動、アフリカ地域を対象とする貿易の内容を追求し、「ギネー」とは何かを明らかにしていきたい。

2.2 オランジュの歴史芸術美術館、アルルのレアテュ美術館の絵画作品

「トワル・ドラングジュ」Toile d'Orange もアンディエンヌの一種であり¹¹、ギネーと共に重要な研究対象である。トワル・ドラングジュは、フランスの南部の都市オランジュで生産された布という意味である。1736 年、スイス人デュ・カントン・ダバンツェルは、マルセイユに近いユヴォンヌの海岸に工場を設立した。その管理人、ジャン＝ロドルフ・ヴェテルが 20 年間、この工場を経営したことが知られている。ジャン＝ロドルフ・ヴェテルは、1757 年、マルセイユを去り、オランジュにアンディエンヌ工場を建設し、この工場は発展をとげた¹²。トワル・ドラングジュは、つまりオランジュに建造され、成功をおさめた工場の生産品に名付けられた名称である。ポンパドゥール夫人の財産目録にトワル・ドラングジュで作られたローブとスカートが記されているが、これはここで生産された布である。

トワル・ドラングジュの調査のため訪問したオランジュ歴史芸術美術館には、過去オランジュのアンディエンヌの生産が盛んであったことを表す絵画作品が残っている。画家ジョゼフ・ガブリエル・マリア・ロセティによりジャン＝ロドルフ・ヴェテルの工場の様子を描いた作品である。先が見えないほど広い工場で数百人の女性がぎっしり座り、布の上に筆を用いて模様を描いている様子は、アンディエンヌの需要がどれほど大きかったのかを如実に示している¹³。同じアンディエンヌ工場において、各種の染織工程にかかわっている労働者の様子を描いた絵画も残されている。木版を用いて文様を押し出すところ、デザイナーたちが蠟燭をともした部屋でデザインに臨んでいるところ、図案を木版に彫刻するところ、野原で布を漂白するところなど、アンディエンヌにかかわる多くの工程の労働者の姿を生き生きと描いている。また、絵画の中で工場の中央に、赤地に緑色で花模様をプリントしたアンディエンヌの一式を揃えて着たジャン＝ロドルフ・ヴェテルは、成功を収めた企業家の堂々とした様子で描かれている。オランジュ歴史芸術美術館に所蔵されている絵画は、所蔵番号も付けられていないまま保存、展示されているが、オランジュがアンディエンヌ生産において繁栄していた時代を雄弁に物語っている。

オランジュの歴史芸術美術館の絵画作品は、トワル・ドラングジュの生産工場の巨大さに加え、トワル・

ドラングジュがアンディエンヌを代表するほど、多く生産され広がったことを明らかにする上で貴重な資料になると思われる。

オランジュ近郊の都市アルルには、アンディエンヌを着た女性たちの絵画作品が残されていることが知られている。アルル出身の画家であるアントワヌ・ラスパル(Antoine Raspal, 1738-1811)は、アルルの人々の表情や服装を細部にわたって生き生きと描いており、最良の証言を今日に伝えてくれる画家である。アルルにはアルラタン美術館、レアテュ美術館がある。アルラタン美術館には、アンディエンヌを着ているアルルの女性たちを描いた絵画作品や、各種のアンディエンヌの衣服が保存されており、この衣服についての研究書もあると知られている。しかし、この美術館は、2009 年 9 月から 2015 年までを目標として大々的な復元工事が行われている。レアテュ美術館に展示されているアントワヌ・ラスパルの絵画には、花模様のついたアンディエンヌと推測される布地を着た女性が描かれている。彼の絵画の中には、アンディエンヌ以外にも、刺繍としても生き生きとした花模様を表現していたようなものもある。アンディエンヌの多彩な花文様の服装の女性を描いた作品を、生地の花模様に刺繍のような細かいきめ模様が入っていることを教えてくれる。綿布の上に刺繍として繊細な花模様を表現したのかという点について、オランジュの歴史芸術美術館で目にしたフランスの縫い物、刺繍、レースを取り扱った研究書では、アルルの女性の肖像画について、アンディエンヌと刺繍で装飾したものと述べている¹⁴。また、ポンパドゥール夫人の財産目録には、綿布に刺繍を施したカーテンが記録されているのだが、レアテュ美術館に展示されている絵画で見られるように、綿布の上に刺繍技法も使用されたようである。

アルルには、町の至る所に絵画作品の中のアンディエンヌ衣服の姿の女性たちを思い出させるアンディエンヌの専門店が並んでいた。衣服では男性のワイシャツが特に多く、その他女性のスカート、子ども用の衣服が多く、その他、テーブル掛け用、クッションなどアンディエンヌを現代的に使用した多様な生活用品が取り扱われている。

今回の海外調査研究を通して得られた貴重な資料であるリシュリユー・コレクションと、絵画作品をもとに、アンディエンヌ及びアンディエンヌの種類、18 世紀の綿布の名称を検討し、アンディエンヌを好んだ当時の人々の情緒や美意識の考察へつなげたい。

注

1. Jaques Savary des Bruslons, *Dictionnaire universel de commerce, d'histoire naturelle, et des arts et métiers*. Vol.1~Vol.4, Paris, 1750.
2. Henri Havard, *Dictionnaire de l'ameublement et de la*

- décoration depuis le 13e siècle jusqu'à notre jours*, 1838-1921, Paris, 1999.
3. Forbonnais, François Véron Duverger de, *Examen des avantages et des désavantages de la prohibition des toiles peintes*, Marseille, 1755.
 4. Maréchal de Richelieu, *Echantillons d'Etoffes et Toiles des Manufactures de France et étrangères*, 1732-1737, Paris ; LH45-FOL à LH45(F)-FOL
 5. ロジェー＝アルマン・ヴェイジエール『18世紀フランス織物ーリシュリユー・コレクション』 宮川淳訳、美術出版社、1964年、8-11頁。
 6. ロジェー＝アルマン・ヴェイジエール、前掲書、12頁。
 7. Pierre Richelet, *Dictionnaire de la langue Française ancienne et moderne*, Les Frères Duplain, Lyon, 1759, (1987), Tome II, p.334.
 8. Henri Havard, *op.cit.*, Tome II, p.1241.
 9. *Marseille-Provence au contact du monde : Marseille sur les routes de la soie*, Tome II, Chambre de commerce et d'industrie Marseille-Provence, 2001.
 10. *La Musée de la compagnie des Indes*. Musée de la compagnie des Indes(Port-louis, Mobihan), Lorient, 1990.
 11. Henri Havard, *op.cit.*, Tome III, p.1168.
 12. H. Chobaut, L'industrie des Indiennes à Avignon et à Orange(1677-1884), *Extrait des mémoires de l'academie de vacluse*, Avignon, 1938, pp.16-19.
 13. «Atlier de la manufacture Wetter» Joseph Gabriel ROSSETTI, XVIIIe siècle, Musée d'art et d'histoire Orange.
 14. Marie le goaziou et Nathalie bressson, *La France au fil de l'aiguille*, Éditions Ouest-France, 2002.

クオン ユミ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻